

# 研修会参加報告書

山口 忠孝

第 16 期自治政策 in 横浜 II

◆平成 26 年 11 月 1 日(土)～11 月 2 日(日)

◆自治体議会政策学会主催 神奈川県民ホール

「消滅自治体」危機からの脱却—人口減少・高齢化社会を豊かに

今、日本は人口減少・高齢化社会が現在進行で、様々な問題が惹起している。今回、講師の方の名前をみて話を聴いてみたいと思い参加しました。

〈全国から 43 自治体 73 名が参加〉

11 月 1 日(土)【1 日目】

講義 I 人口減少と日本の未来—歴史からみる人口問題

上智大学経済学部教授 鬼頭 宏氏

講義 II 次世代=子ども・若者が希望を持てる社会とは

—子どもの貧困対策の構築

立教大学コミュニケーション福祉学部教授 湯澤 直美氏

11 月 2 日(日)【2 日目】

講義 III いまこそ地域の力—食と農とまちづくり

ジャーナリスト 大江 正章氏

講義 IV 広がるフードデザート—高齢者・買物難民とまちづくり

茨城キリスト教大学文学部准教授 岩間 信之氏

講義 V 新たな地域医療を目指して

—病院完結型から地域完結型への再構築

佐久総合病院診療部長 北澤 彰浩氏

講義 I

講師の鬼頭宏氏は歴史人口学の専門家として著名であり、その名前は以前から知っていた。このセミナーに参加しようと決めた要因の一つが鬼頭氏のこの講義だった。

○人口の世界史的な動きや日本のこれからの人口は、どう考えても 21 世紀中は減少していくのは間違いない。人口減少は「近代経済成長」の成熟局面への移行に伴う普遍的な現象である。人口は増加し続けることはなく、増加と減退を繰り返すは波動的に変動してきた。人口増加は文明システムの転換に伴う現象で、人口減退は文明システムの成熟化に伴って起きる不可避的な現象である。ゆえに人口をめぐる議論には、長期的な視点が必要であり、人口減少対策は新しい文明の創造につながるものでなけれ

ばならない。

かつて日本は、世界的な人口増加抑制に対し「静止人口」の実現を国家目標としていた（1974年）。その予測は間違いではなく2010年を境に減少に転じが、その後の社会がどうなるのかは誰も想像できなかった。これからは、まず人口を安定させなければならない。出生率を人口置換水準（出生率=2, 1）へ回復させ（20～30年後）、「静止人口」を実現させる（50～70年後）。そして社会規模の縮減にかかわらず、快適な都市、豊かな地方を形成して、持続可能な社会を築かなければならない（新たな国土形成、集落・都市の再編成）。また、超高齢化社会（長くなったライフサイクル）への適応—高齢者の概念、高齢者の生活支援、高齢者自身の人生設計—を確立していかなければならない。

#### まとめと感想

人口減少は避けられない現実であり、これまでの価値観や経済環境の転換を考えていかなければならないと思う。長い歴史の流れからみると新しい文明の創造の始まりである。しかし、講義の中身には具体的な提案や新しい施策も示されず物足りなさを感じた。また講師の専門である徳川時代後期の人口や社会の動き、分析などをもっと聴けると思っていたので少々期待はずれであった。こういう場では仕方がないのかも知れない。いずれにしても、これからのまちづくりは目先のことばかりではなく過去を振り返り、次の世代のことを考えてやっていかなければならないと感じた。

#### 講義Ⅱ

この講義のテーマは、子どもの貧困の状況、子ども期に貧困にさらされる影響、貧困の解決に向けてであった。

○現在の日本では、子どもの貧困率は全年齢層の貧困率より悪化してきている。社会情勢の変化により、生活基盤が弱い母子世帯・ひとり親世帯が増加し、子どもの養育や教育費の負担が大きな問題となり、若者の就労にも影響を与えている。

子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、また、貧困が世代を越えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育の機会均等を図り、全ての子どもたちが夢と希望を持って成長していける社会を目指し、子どもの貧困対策を総合的に構築していかなければならない。

そのためには、教育の支援や生活の支援が必要であり、子どもの貧困の実態を踏まえて対策を推進する。教育支援では、「学校」をプラットフォームとした総合的な貧困対策を講じ、教育費負担の軽減を図る。生活支援では、保護者（親）の就労支援や子どもの生活支援・経済的支援が必要となってくる。国や地域、官公民の連携で国民運動として取り組んでいかなければならない。

## まとめと感想

豊かな日本の現代社会において、子どもの貧困が問題となってきた。この現実を直視し、これからの福祉対策を考えていかなければならない。公平な社会、社会の富の公平な分配を考える時、子どもの貧困の存在がその指標として表れているのではないかと考えさせられた。

## 講義Ⅲ

講師の著書である『地域の力—食・農・まちづく』(岩波新書)はすでに読んでいたのでどのような人なのか興味があり、また、直接話が聴けるのはまたとない機会だと思い今回このセミナーに足を運んだ次第だ。

○まず、『地方消滅』増田寛也編著(中公新書、2014年8月)の本について痛烈な批判から講義は始まった。この本は、人口減少問題に乗じて農山村をつぶして拠点都市を地方に作り、効率のいいまちづくりを考えている。時代遅れの経済成長優先政策の反映とグローバリゼーションへの対応と東京オリンピックに向けた体制刷新を狙ったものだと喝破された。

この後、自ら足を運ばれ、元気に頑張っている地方の実例を(3か所)紹介された。

- 1,有機農業と地場産業の提携による循環型経済に取り組んでいる一埼玉県小川町
- 2,自治体主導の資源循環とアンテナショップを展開している一福井県池田町
- 3,田園回帰を進める二つの戦略(手厚い子育て支援とA級グルメのまちづくり)

一若年女性人口が増えた島根県邑南町

最後に、これからの地域づくりについて

- ・環境と自治を重視した持続可能なまちづくり
- ・経済成長路線の帰結が低出生率—子どもを育てにくい社会
- ・小規模だからこそ可能性がある—小さいからこそ輝く地域・まちづくり

## まとめと感想

私も“地方消滅”という言葉に疑問を抱いていたので、今回の講義を聴いて快哉を得た。どうしてそういうことが言えるのか、消滅すると名指しされた自治体に失礼ではないかと憤りさえ感じていた。「若年女性半減=市町村の消滅」というのは乱暴な推論とか、人口1万人以下の場合、なぜ「消滅可能性」が「消滅」に変わるのかと具体的な指摘は真理を衝いていると思う。こういう脅しにも似たまやかしに踊らされてはならないと注意を喚起されました。私は質疑応答で、「これからの子どもたちにどうい教育をしたらいいのか」訊ねたところ「食育だけではなく、食農教育が大切ではないか、自然の中で育てるという当たり前のことが基本になる」と答えられた。

## 講義IV

フードデザートという耳慣れない言葉で理解しにくい面があった。高齢者・買い物難民という言葉は、買い物弱者・交通弱者と同じような意味かなとぼんやり感じていた。元々イギリスで黒人や低所得者層たちが多く住む居住区で店や各種サービス業が撤退し、普通の生活が困難になった地区のことを言うらしい。

○フードデザートとは、生活環境の悪化のなかで健康的な食生活の維持が困難となった、都市の一部地域を意味するもので、社会的弱者（高齢者）が集住する地区や食料品アクセスの低下とソーシャル・キャピタル（相互扶助）の低下のいずれか、あるいは両方が発生している地域を指す。このような地域は低栄養などの健康被害の可能性が考えられる。

買い物弱者の問題は、「具体的に誰が、どこで、どのように困っているのか？」が不明瞭な点にあり、実態調査が不十分なまま、「買い物弱者 600 万人」という数字が独り歩きしてしまっている。そのため、買い物弱者支援事業の多くは、支援対策が不明確で手探り状態である。ここで、宇都宮市のフードデザート問題調査の詳細な事例報告がなされた。アンケートやインタビュー調査の分析をもとにマップ（地図）を作成し、支援を必要とする高齢者をある程度絞り込める。これを活かし食育と連動した事業やまちづくりへの活用が望まれる。

## まとめと感想

フードデザートは都市部だけの問題なのか、九州の方でもこういう問題を取り上げて研究されているところがあるのか、これは福祉関係の問題なのかなど、講演後講師の先生に質問した。買い物弱者など地方の田舎である本市でも言われるので気になったが、今のところ都市部での問題提起をやっているとのことだった。都市部での孤独や無縁社会の問題があり、田舎の問題とは少し状況が異なるようだ。

## 講義V

佐久総合病院の建て替え問題に関する奮戦記とでもいう講演の内容だった。以前読んだ『信州に上医あり』（岩波新書）の若月俊一医師が築きあげた地域医療で有名な病院の話なのでその実態に関心を持って聴くことができた。

○現在の病院は昭和 40 年に建てられ老朽化が進み、建て替えが必要となってきた。平成 12 年から現在地に建て替えを検討したが、病院を運営しながらではどうしても無理なので移転することになり、他に土地を購入する話を進めたが、地元の住民や地域から移転反対の声が上がった。これに対し、病院の全ての職員が手分けして住民への説明会を開き、地域の方々と病院の現状やこれからを話し合った。また、地

元の医師会とも地域医療の住み分けや協力体制の整備などの話し合いで理解を求めた。市民はもちろん、市議会の議員にも働きかけた。さらに、新しく購入した土地が使用目的が限定されていて病院が建てられないことがわかると、建設許可を求める署名を職員全員がまちに出かけて集めた。まさにこの病院の伝統である“地域に出て行って、現場の声を聴く”が生かされた瞬間でもあった。

このような努力が実って、平成 21 年知事裁定で建設の許可があり、今年平成 26 年 3 月に新しく開業に至った。これからの医療の在り方として、病院完結型（予防から治療、療養まで）ではなく、地域完結連携型医療体制を目指していきたい。

#### まとめと感想

“医療は民衆のものであり、民衆がつくるものである”これは、佐久総合病院の祖若月俊一の言葉である、今回の講師である北澤彰浩氏もこの精神をどこかに引き継がれているような気がした。北澤氏の話の端々に地域の人々という言葉が頻繁に出てきて、これからの医療の在り方を示しているようだった。専門的な難しいことは分からないが、福祉行政は医療機関との連携をさらに密にしていかなければならないのではと感じた。

#### おわりに

セミナーの終わりに主催者から挨拶があり、その中で私の質問のことを取り上げて話をされた。遠路はるばる出かけて来たかいたったような気がする。これからも今回のセミナーで学んだことを頭の中に入れて、物事を考え、議員活動をしていきたい。